資料１

海難状況等について

海上保安庁

交通部

平成２９年２月

目次

ページ

船舶事故の現状

全体傾向 ・・・ 1

計画目標に関する船舶事故状況等

ふくそう海域における衝突・乗揚事故の低発生水準の維持 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

港内等における衝突・乗揚事故の減少 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

小型船舶における事故の減少 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

[参考]第10次交通安全基本計画の目標 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

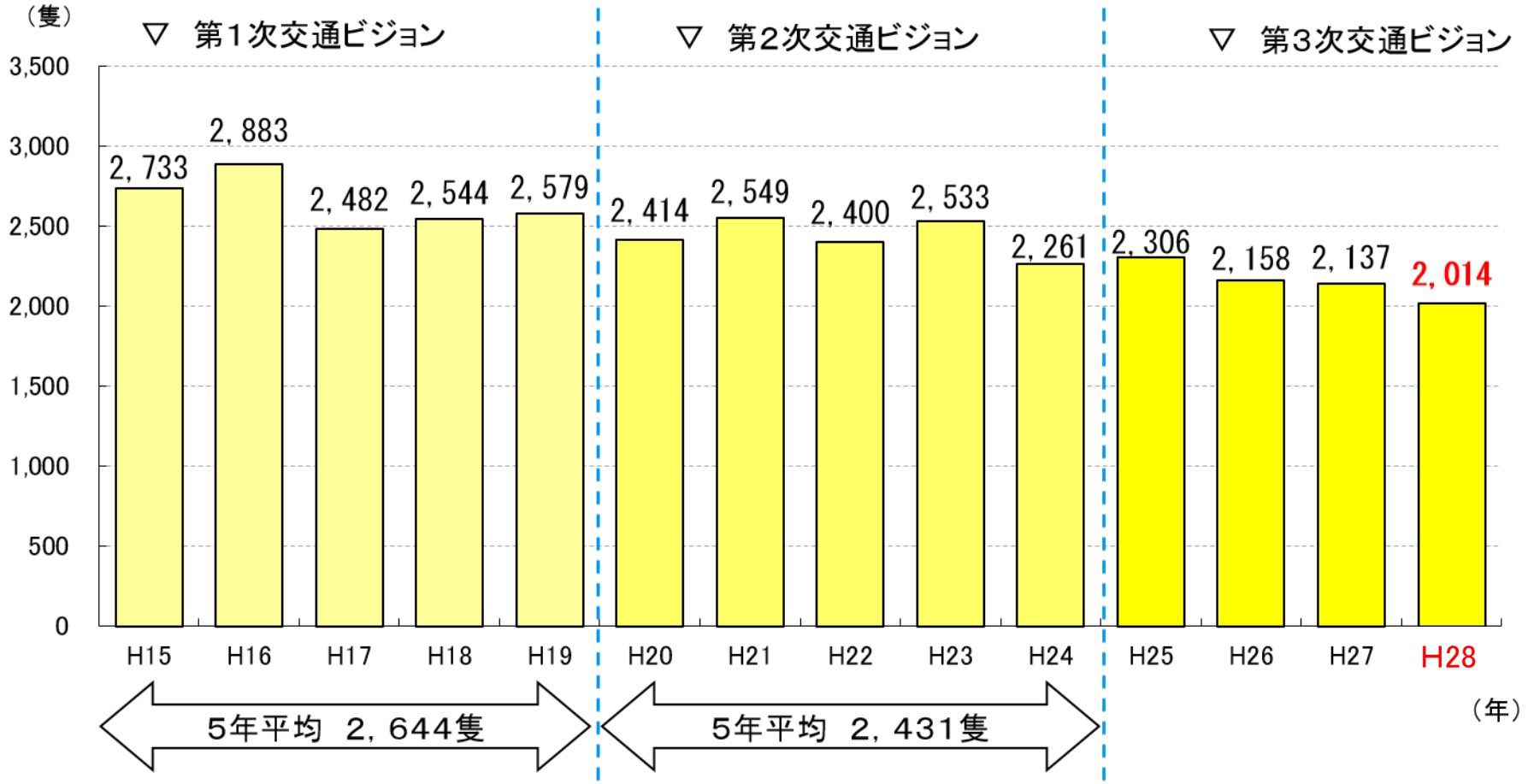
[参考]AISの普及状況 ・・・ 9

2016年の船舶事故事例 ・・ 10

船舶事故の現状

船舶事故隻数の推移（平成15年～平成27年）

・平成28年の船舶事故隻数は、**2，014隻**、前年と比較して、**123隻（5．8%）減少**
・第2次交通ビジョンの期間（20～24年）の年平均2，431隻と比較して、**414隻（17．0%）減少**

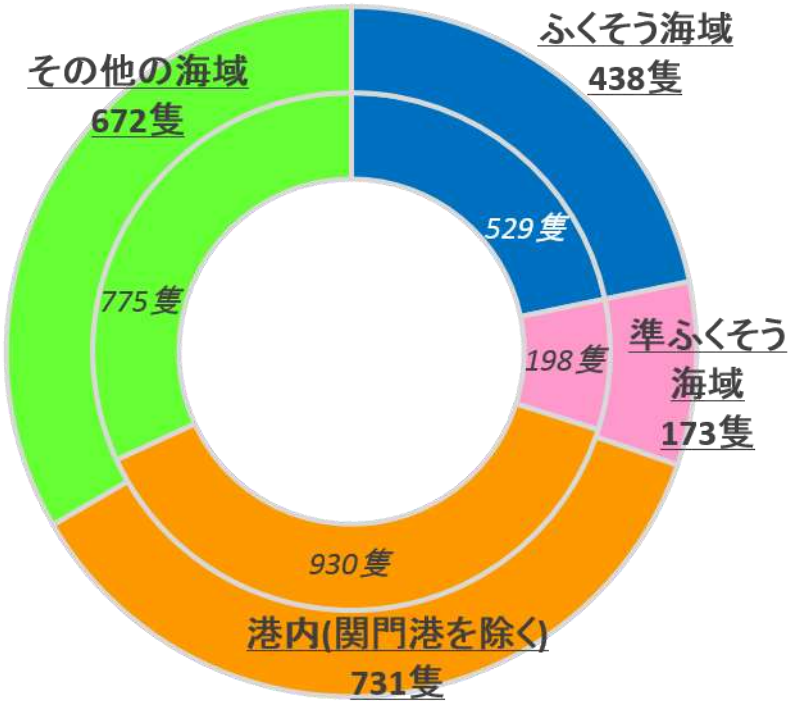


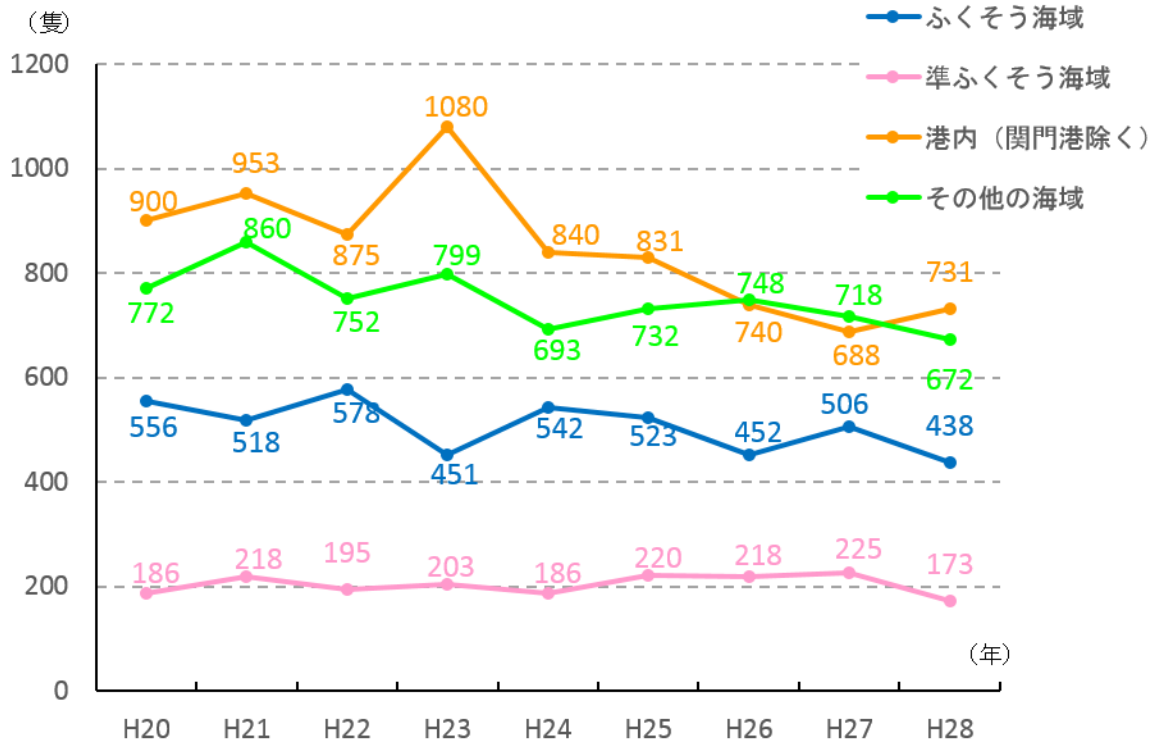
※平成28年の数値は、平成29年2月1日現在の速報値 （以下同じ）

海上保安庁

海域別による船舶事故隻数の推移

前年と比較して、ふくそう海域で**68隻（13．4%）減少**、準ふくそう海域で**52隻（23．1%）減少**、港内で**43隻（6．3%）増加**、その他の海域で**46隻（6．4%）減少**



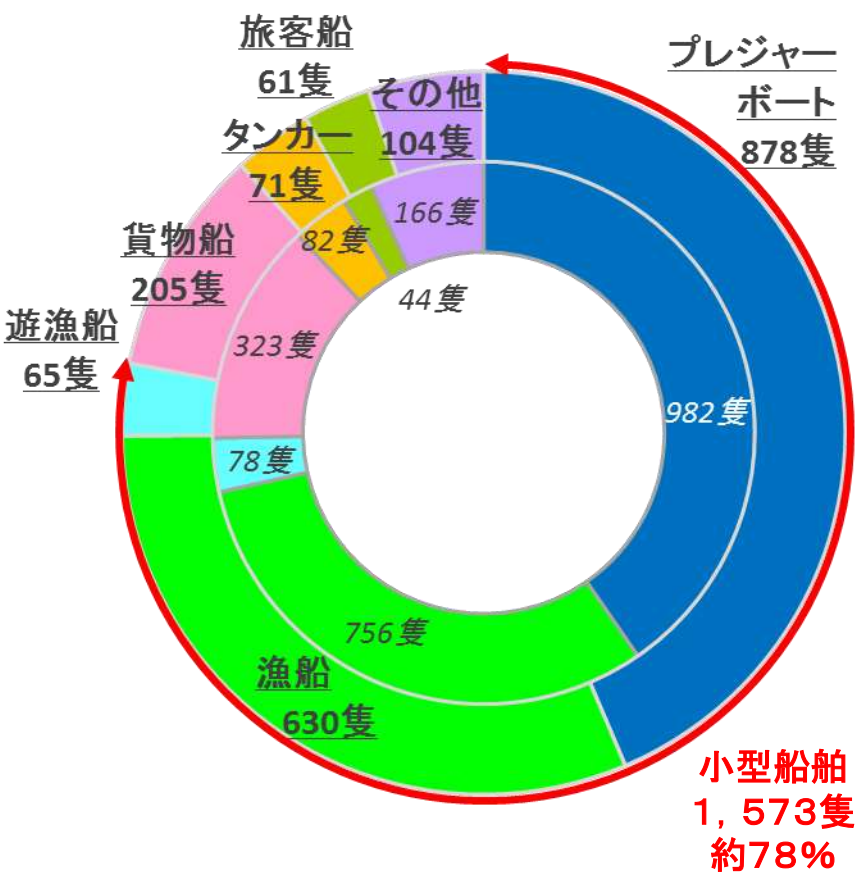


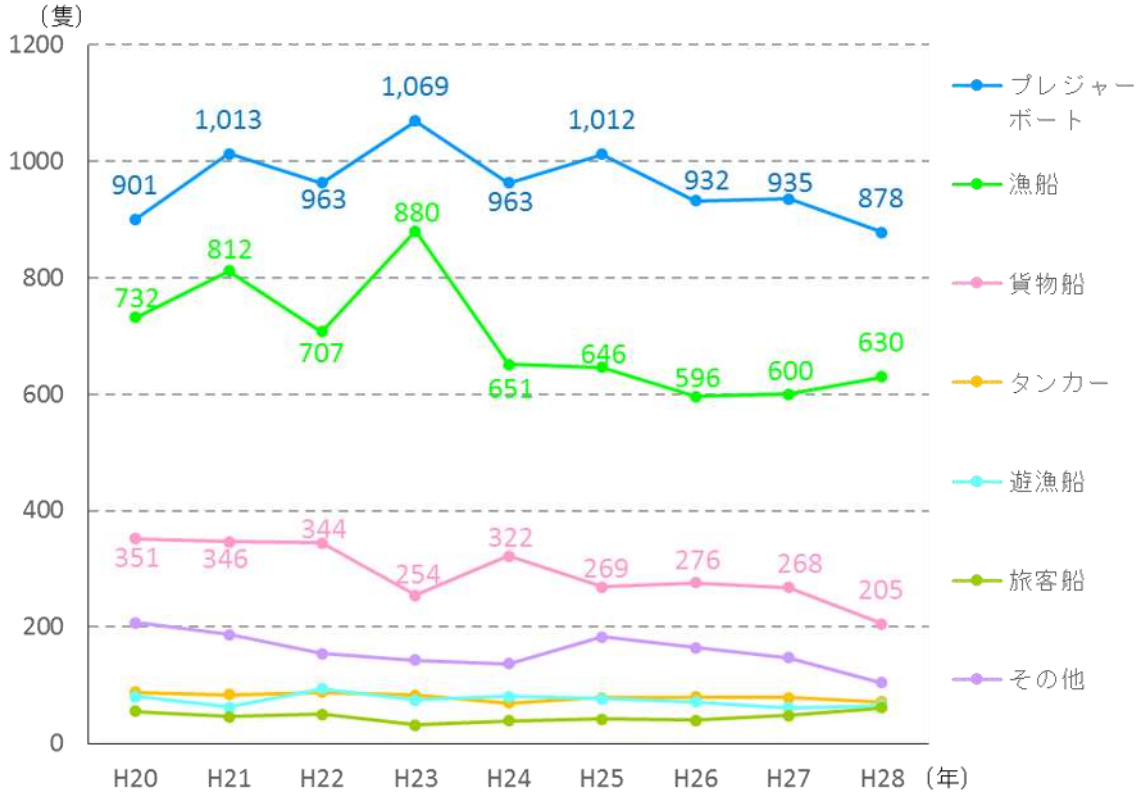
内側グラフ：第2次ビジョン期間（平成20～24年）の年平均事故隻数
外側グラフ：平成28年事故隻数

※ふくそう海域
東京湾、伊勢湾、瀬戸内海（海上交通安全法適用海域）及び関門港（港則法適用海域）
※準ふくそう海域
ふくそう海域を結ぶ東京湾湾口～石廊埼沖～伊勢湾口～潮岬沖～室戸岬沖～足摺岬沖の各海域を経て瀬戸内海に至る海域

船舶種類別による船舶事故隻数の推移

前年と比較して、貨物船が**63隻（23．5%）減少**、プレジャーボートが**57隻（6．1%）減少**、漁船が**30隻（5．0%）増加**、船舶事故隻数に占める小型船舶の割合は、**約78%**と多くを占めている。



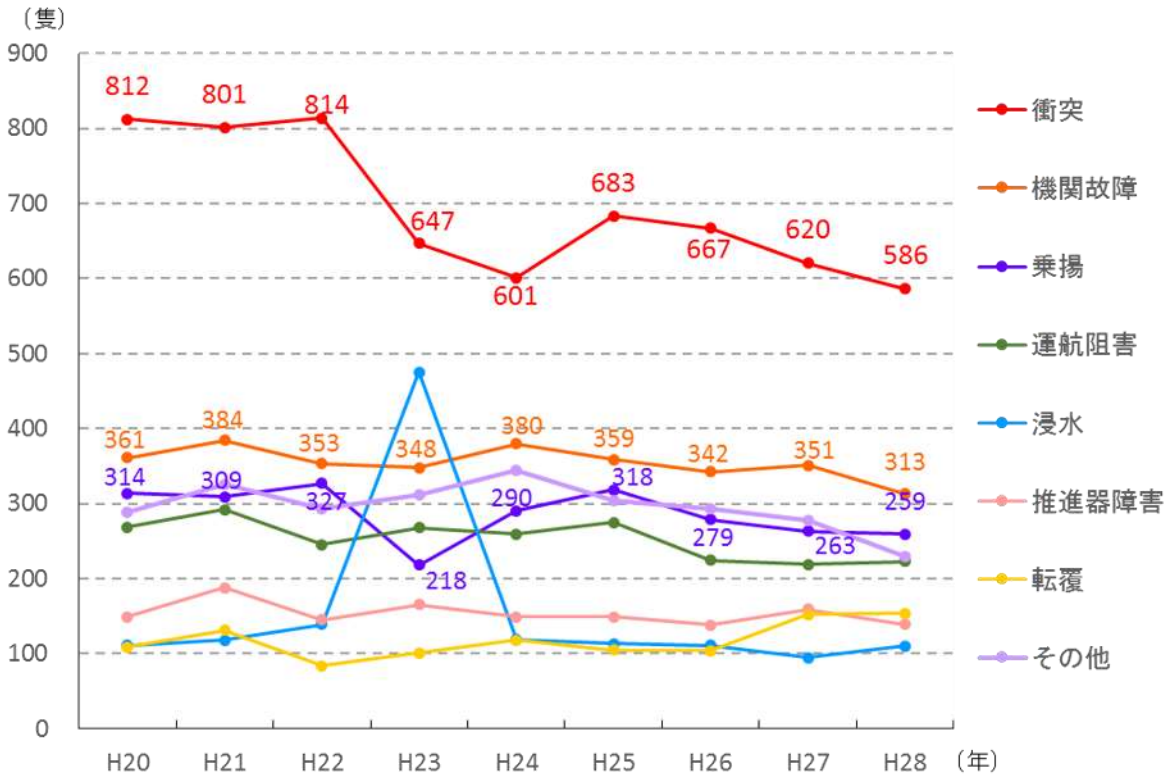


内側グラフ：第2次ビジョン期間（平成20～24年）の年平均事故隻数
外側グラフ：平成28年事故隻数

※山陰地方豪雪関連事故を含む
〈内訳〉
・H22：6隻（漁船2隻、プレジャーボート4隻）
・H23：346隻（漁船215隻、遊漁船8隻、プレジャーボート119隻、その他4隻）

事故種類別による船舶事故隻数の推移

前年と比較して、機関故障が**38隻（10．8%）減少**、衝突が**34隻（5．5%）減少**



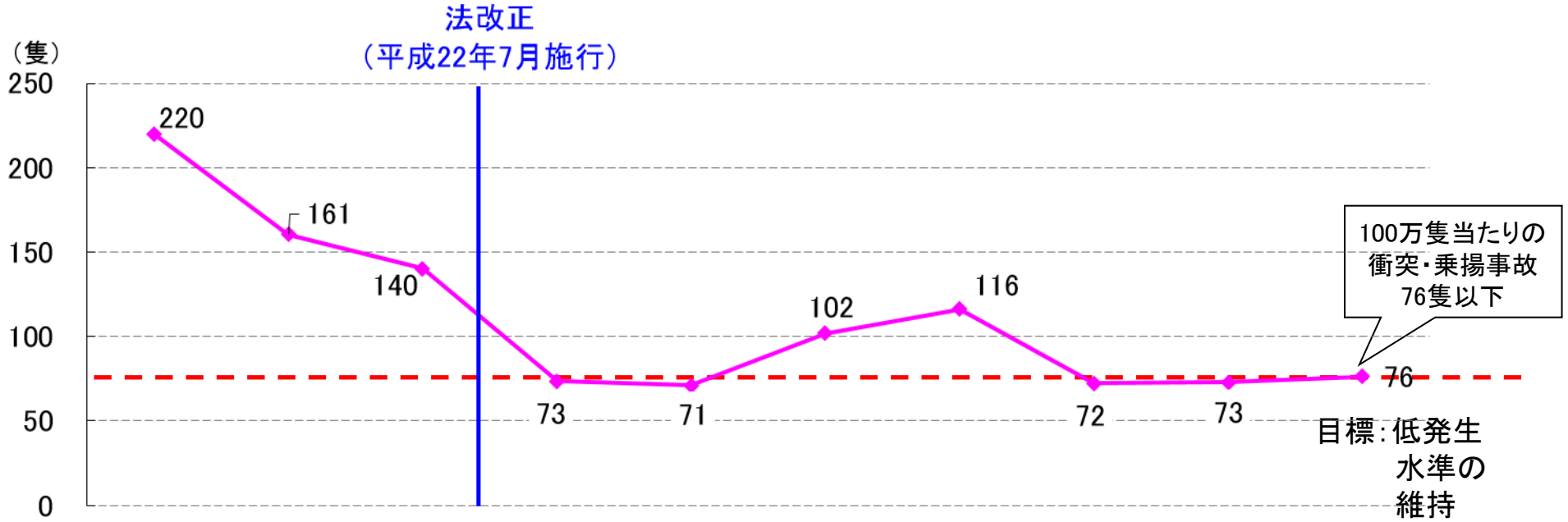
内側グラフ：第2次ビジョン期間（平成20～24年）
の年平均事故隻数
外側グラフ：平成28年事故隻数

※山陰地方豪雪関連事故を含む
〈内訳〉
・H22：6隻（漁船2隻、プレジャーボート4隻）
・H23：346隻（漁船215隻、遊漁船8隻、プレジャーボート119隻、その他4隻）

計画目標に関する船舶事故状況等

ふくそう海域におけるAIS搭載船舶通航隻数100万隻当たりの衝突・乗揚事故発生の推移

平成28年は、100万隻当たりで**76隻（前年比3隻増）**であり、目標とする76隻以下を維持している。



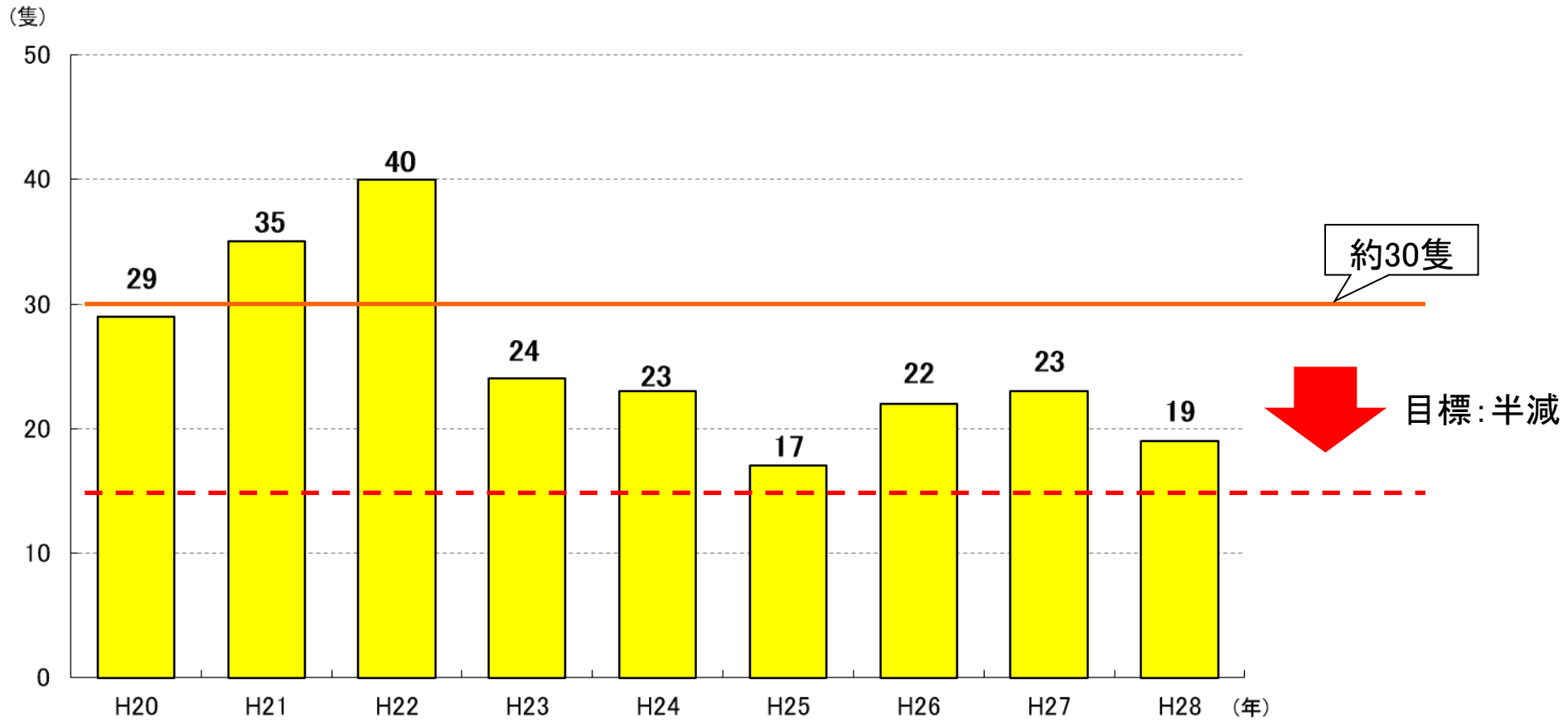
	H19.7-H20.6	H20.7-H21.6	H21.7-H22.6	H22.7-H23.6	H23.7-H24.6	H24.7-H25.6	H25 注	H26	H27	H28
事故隻数	79	66	60	33	34	51	59	38	39	41
ＡＩＳ通航隻数	359,377	410,988	428,452	449,725	478,168	500,423	507,576	526,013	536,133	537,063

対　象　海　域　：　航路及び航路付近海域（海上交通センターのレーダーサービスエリア）
　　ただし、名古屋港海上交通センターの全海域及び関門港以外の港域を除く
対象事故隻数：　総トン数100トン以上の船舶又はAIS搭載船舶
ＡＩＳ通航隻数：　海上交通センター（名古屋港海上交通センターを除く）の情報提供可能海域内の航路を通航したAIS搭載船舶

注）答申では42隻（速報値）ですが、対象海域等を精査したところ、51隻（確定値）となっております。

港内等における衝突・乗揚事故発生の推移

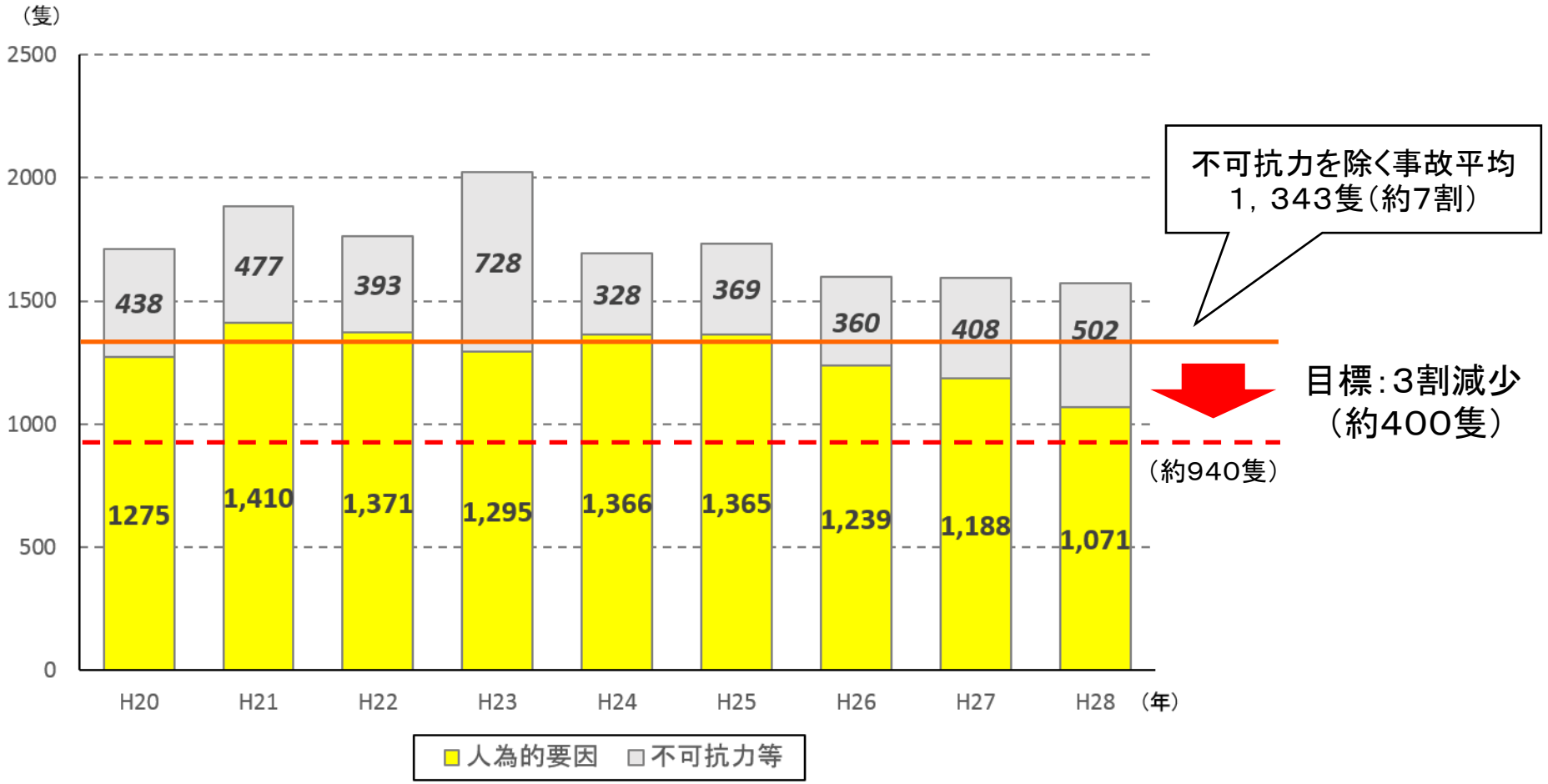
第2次交通ビジョンの期間（平成20～24年）の船舶事故の平均隻数は、約30隻（151隻／5年間）
平成28年の船舶事故隻数は、**19隻（前年比4隻減）**であり、半減という計画目標の達成には減少が必要。



対　象　海　域　：東京湾（情報聴取義務海域を除く）、京浜港、千葉港
対象事故隻数：総トン数100トン以上の船舶

小型船舶における事故発生の推移

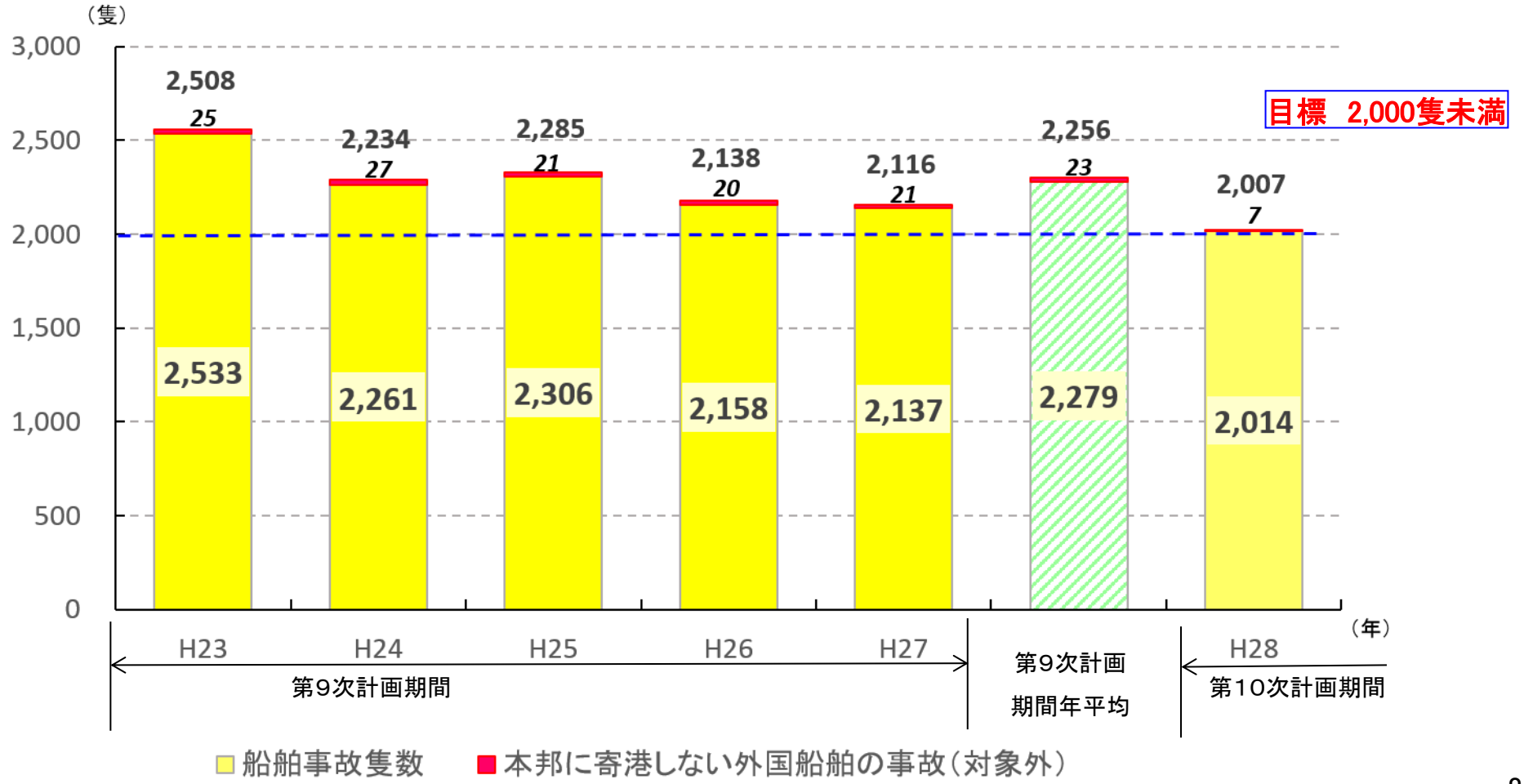
第2次交通ビジョンの期間（平成20～24年）の小型船舶事故の平均隻数は、1，343隻（6717隻／5年間）
平成28年の船舶事故隻数は、**1，071隻（前年比117隻 減）**であるものの、3割減少という計画目標の達成にはさらに大幅な減少が必要



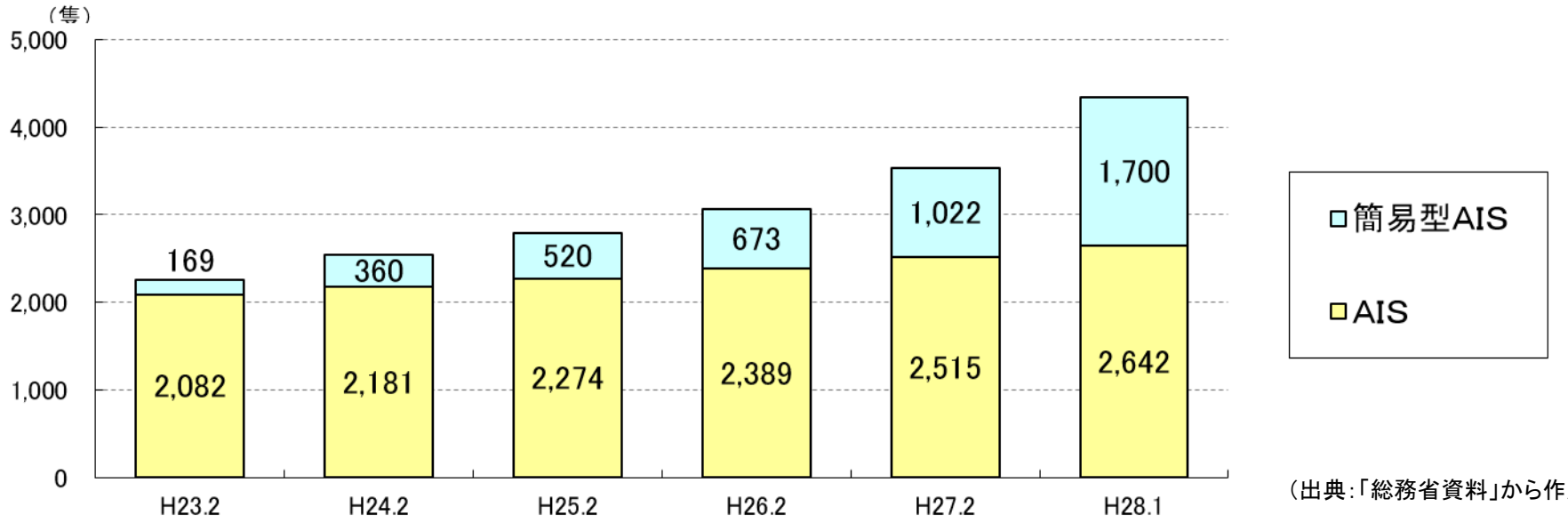
我が国周辺海域で発生する船舶事故隻数の減少

我が国周辺で発生する船舶事故隻数（本邦に寄港しない外国船舶によるものを除く。）を平成32年までに、少なくとも2，000隻未満とする。

平成28年の船舶事故隻数は**2，007隻（前年比123隻減）**



日本籍船のAIS普及状況の推移 ／ 日本籍船の隻数



（出典:「総務省資料」から作成）

		平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年
一般船舶	内航船	5,357隻	5,302隻	5,249隻	5,235隻	5,184隻
	外航船	136隻	150隻	159隻	184隻	197隻
プレジャーボート	水上オートバイ	約66,000隻	約64,000隻	約63,000隻	約62,000隻	約62,000隻
	モーターボート	約198,000隻	約190,000隻	約184,000隻	約178,000隻	約173,000隻
	ヨット	約11,000隻	約11,000隻	約11,000隻	約10,000隻	約10,000隻
漁船	漁船	約253,000隻	約254,000隻	約249,000隻	約243,000隻	約237,000隻
合計		*約533,000隻*	*約524,000隻*	*約512,000隻*	*約498,000隻*	*約487,000隻*

（単位:隻数）

データ年　内　航　船 :年度末（出典:海事レポート 海事局）　漁　船 :年末 （出典:漁船統計表 水産庁）
外　航　船 :6月末 （出典:海事レポート 海事局）　ﾌﾟﾚｼﾞｬｰﾎﾞｰﾄ :年度末（出典:海事レポート 海事局）

2016年の船舶事故事例

発 生 月　7月
事故船舶　砂利運搬船（499トン、3名乗組）、貨物船（499トン、5名乗組）
概　　要　兵庫県姫路沖にて砂利運搬船と貨物船が衝突し、砂利運搬船が転覆した。同船は沈没し、乗員2名が死亡した。

発 生 月　8月
事故船舶　外国籍タンカー（3380トン、15名乗組）
　　日本籍タンカー（144トン、3名乗組）
概　　要　川崎沖にて外国籍タンカーと日本籍タンカーが衝突し、日本籍タンカーは甲板まで水に沈んだ。けが人はいなかったが、積荷の軽油が約70キロリットル流出した。

発 生 月　12月
事故船舶　タンカー（199トン、4名乗組）
概　　要　山口県の徳山下松港沖で水酸化ナトリウム400トンを積んだタンカー（199トン）が浸水し、船体が傾き自力航行できない状態となった。乗組員は避難してけがはなく、油や水酸化ナトリウムの流出も確認されなかった。

発 生 月　8月
事故船舶　プレジャーボート（19トン、4名乗船）
概　　要　千葉県銚子市沖にて、釣り大会に参加していたプレジャーボートA号は、「銚子マリーナに向う。」旨の無線通信を最後に連絡途絶となった。後に海上において、乗船者4名が心肺停止の状態で発見され、船体の一部、救命浮環等が回収された。

事故船舶（通常時）

発 生 月　8月
事故船舶　プレジャーボート（18トン、12名乗船）
概　　要　神戸港内にて、花火大会観覧を終えたプレジャーボートB号は、堺港向け帰港中のところ、防波堤の存在に気付かず高速で衝突し、乗船者12名のうち8名が負傷、船体は沈没した。

事故船舶（沈没状態）

発 生 月　12月
事故船舶　漁船（76トン、底引き網漁業、9名乗船）
概　　要　島根県美保関沖にて、エンジントラブルで曳航されていた漁船A丸が転覆・沈没し、乗組員9名全員（日本人8名、インドネシア人1名）が行方不明となった。
その後の捜索により、乗組員4名が発見されたが、いずれも死亡が確認された。

事故船舶（通常時）